

第四章

私と事業団・労働者協同組合運動

浦沢 栄

「反骨精神で生きてきたが、いろいろな人にお世話になつた」

浦沢 栄

一九二四年生まれ。一九七九年九月～全国協議会事務局長、一九八一年三月～常任理事、一九八九年九月～一九九五年五月労協連合会理事。



失業したり、戦争未亡人になつたりしたんだ。生きるために失対で働いているんだ」と思つていた。だから、自分たちで仕事をおこそうという事業団には反対だった。

中西委員長は、「民主的改革」運動を基礎に、町に役立つ失対事業再確立を要求していく方針を提唱した。労働組合運動の画期的な路線である。やがて、失対で働いていた仲間も年齢などで追い出されることがになり、事業団は失対の仲間を守るためにも重要なことになつた。私は、事業団を自分たちでつくつて、できる仕事を開拓してやるしかないかと思つた。

一九七九年に中高年雇用・福祉事業団全国協議会ができる、事務局長に任命された。

戦後、復員し、日本通信工業（川崎市）で機械仕上げ工として働いた。一九四九年「企業整備」の名によるレッドページで首になつた。働くところがなく、川崎市失業対策事業で働いた。全日自労に入り、「組合の報告」と言つては、仕事を中断し、現場監督と喧嘩もした。川崎地区共闘委員会議長、全日自労神奈川県本部委員長、本部中央執行委員を務めた。中西五洲委員長が、「愛される失対」と言つたが、「好き好んで失対にいるんじゃない。国の責任で、

で一步踏み出してほしいと話してきた。

私が本部中央執行委員を退任し、神奈川に戻った

当時は、全日自労県本部も事業団に反対か消極的な空気が強かつた。

任意就業事業、高齢者就労、失対事業等打切り反

対で、県、川崎市と交渉、一九八八年に川崎中高年事業団を設立し、県、市から仕事を確保した。しかし、「自分たちがいつまでもやれる訳ではない。いずれ次の人引き継がなければならない」「川崎だけでやつてはいるより全国と結んだ方がよい」と考え、一九八九年四月、鎌倉中高年事業団とともに、センター事業団と統合した。

当時の主な仕事を挙げておく。

◆生田、等々力、森林、大師、夢見が崎動物公園など、主な県、市公園、緑地、市営緑ヶ丘霊園などの除草、清掃

◆公園事務所、福祉施設、高校の体育館・トイレなどの清掃

◆川崎医療生協・診療所などの清掃

◆南武線・東急線、川崎各駅前の駐輪場の整理・管理

永戸祐三（理事長）さんは、組合中央本部勤務のとき、現場オルグをしてもらつた。仲間は「大学まで行つた人が」と感心したり、「ありがたいね」と言つていた。全国協議会事務局長などを歴任され、理事長として労働者協同組合の理念を明確にし、運

動、事業を大きく発展させる指導力を發揮されてきた。

やがて、高齢者協同組合をつくり、「病院で死ぬということ」の映画上映が提起された。

映運動が重い腰を上げさせた。女性たちが、手づくりのチラシを配ってくれたり、映写機を回してくれたり、多くの方に支援してもらつた。麻生市民会館での映画上映と「講演の夕べ（西嶋公子先生）」は六〇〇人余の参加で盛況になった。

川崎市高齢者協同組合準備会（一九九四年一〇月二二日設立）は、市内各地で「懇談会」を開き、梅原健次郎先生と出会い、力添えをいただき、一九九六年五月一九日には神奈川県高齢者生協（黒川俊雄理事長）の設立によって、川崎支部となる。

この中で、次のような事業を展開してきた。

（一）寿司の弁当屋をやっている人が運動に賛同し、場所を貸してくれた。一階で配食事業「味彩」を始め、二階を高齢協の事務所に。

（二）ホームヘルパー養成講座実施。

（三）川崎市から訪問介護派遣事業の委託を受け、中

原区で事業実施（中部ヘルパーステーション）。介護保険実施の前で仕事が殺到し、ヘルパーさんは公園で食事をするなどして仕事をする状況だった。

（四）送迎部の自動車による送迎事業。

（五）特別養護老人ホームのシーツ交換など。

（六）生活学校運動として、「フォーケダンス」（川崎信用金庫を会場に）。「映画上映」（神奈川県各地、川崎市老人いこいの家などで）。「ボランティア活動」

（七）北部訪問介護事業「はなみずき」によるヘルパー派遣。

（八）川崎市営老人いこいの家の管理、運営の委託事業。

（九）生活環境部で川崎市津田山墓地の他民間個人宅等の緑化、家屋の改善清掃事業。

（一〇）日本舞踊（川崎市老人いこいの家で実施）。

また、川崎市営津田山墓地に全日自労川崎連合支

部、川崎支部で、お墓を持たない組合員のお墓「二区画」を確保していたが、組合組織を残さなくしたため、利用料が払えず「無縁墓地」になつた。申し訳ない思いです。

いろいろな人に出会い、多くの人に支えられてきた。そうした点で自分は幸せだった。ありがたかったです。自分でやろうと思ったことは皆さんのおかげでやつてきたと思います。家族にもいろいろ苦労をかけました。

今、介護保険による「リハビリ」を受けていますが、ありがとうございます。

小澤房生 「私の人生『波乱万丈』」

小澤房生

第七期～理事、第一二期～常任理事、第一六期～副理事長、第二三～二九期監事。

一九三三年に塩尻の農家で生まれ、一九七七年に全日本自労と出会い、一九八〇年に長野中高年雇用福祉事業団を立ち上げ、一九九六年に長野県高齢者協同組合を設立。二〇一五年に退職。



事業団運動を振り返り

私の中には「人のため、世のために尽くせ」という親父の哲学が根底にあります。高校を卒業し八陽光学に入社し、誘われて労組運動に参加しました。

レッドページの嵐が吹く時代に指名解雇され、「農村工作隊」に参加しました。二ヶ月程で長野市に戻り、専従活動を開始しました。しかし、四二歳のときの大病し、ようやく一命をとり止めた後、一九七七年から全日自労の専従になり、そこで中西五洲さ



前列右側が小澤さん

んと出会ったのがその後の人生に大きく影響しました。

た。

中西さんの主張する「民主的改革路線」に共鳴し、「経済民主主義」という理論から、長野県では失業対策事業の民革だけではない、地域の経済民主主義の闘いとして取り組む、そういう意味で事業団運動を理解しました。中小零細企業の倒産や解雇事件を取り上げ「不当労働行為」として、地労委の法廷闘争を取り組み十戦十勝しています。

一九八〇年に長野中高年事業団をつくりました。「ニコヨン」と呼ばれる低賃金労働者の組合が、内部に新たな低賃金労働者をつくるのか?という反対もありましたが、政府の失対打ち切り路線が変わらない中で、県からの仕事は出ない。県の方針は「高齢者の仕事対策はシルバー人材センターが担う」の一点張り。そうした中、高校のトイレ清掃の仕事が取れました。これは大変でしたが、みんなで便器の清掃をやりました。

組合が立ち上りました。

院若月俊一総長を理事長として、長野県高齢者協同組合が立ち上りました。

高齢協第一号の事業として平飼い養鶏を始めましたが、長続きはしませんでした。後に次のように書きました。「鶏は毎日卵を産む、しかし誰も販路を考えていません。毎日、毎日コケコッコーと産む。それで慌てた。地元スーパーの『つるやさん』が救いの神で、全部買い取ってくれた。エサも店から出る魚や、野菜くずをいただき、全面的に協力してくれた。さらに、卵油を商品化して最初は売れていた。

これからというときに産卵率が悪くなる。田んぼの跡地に鶏舎をつくつたから排水が悪く、乾燥を好む鶏にとつて最悪の立地条件で、経営的に困難が予想され二年半で養鶏事業から手を引きました」。

試行錯誤、波乱万丈の歩みのなかでも、教訓の二ヤマで行くしかない」という入院患者の声に対しても、そのうちに「ハガキ一枚出しに行くにもパジヤマで行くしかない」という入院患者の声に対しても、病院の中に売店をつくりました。病院の中に売店をつくりました。病院の中に売店をつくりました。

は長野中央病院が初めてです。さらに、アトピーの子どものためにアレルギー対応食品を作ったことが、今の食堂につながっています。

こうして事業団から労働者協同組合へ、人と地域に役立つ仕事おこし、地域づくり、文化を高め、人を育てる労働者協同組合運動に確信を持ちました。特に、長野県では協同組合間協同を強めようと、協同組合懇談会が一九八七年につくられました。そうした動きの中から、一九九六年、佐久総合病院若月俊一総長を理事長として、長野県高齢者協同組合が立ち上りました。

福井センター長野が事務所を移転し、三月には専

務理事が突然行方不明になり、代行を小生がやることになりました。ホームヘルパー養成講座は、県下各地で開講しています。

三月 塩尻市でヘルパー養成講座の修了式、中野市修了式、岡谷市開講式。

四月 長野市開講式、上田市修了式、北信開講式。

五月 松本市開講式、上田市第四期開講式。

七月 塩尻市第二期開講式。

八月 岡谷市第二期修了式。

十月 長野市、北信修了式。

十一月 伊那市、長野市、それぞれ開講式。

十二月 松本市、上田市、それぞれ修了式。

四月一日には、長野市、松本市で指定居宅サービス事業者として事業を開始しました。

六月には本部事務所の移転があり、ふれあい広場つくしの里（弁当製造販売）が始まりました。

九月には「労協ながの」創立二〇周年記念レセプション。

一二月末に、福祉センター長野に県の実地指導が入りました。

二〇〇一年一月には「大岡村自然養鶏まつり」を最後に養鶏事業から手を引いております。

また、松本市での過誤請求の誤りについても、その責任を負って長野県高齢者生活協同組合の専務を退任し、一年後副理事長として戻りました。



岡元かつ子 「協同労働と仕事おこし」

採用するなら五人全部で

労働者協同組合との出会いは一九八七年三月頃だった。自宅から車で一〇分位のところに生活協同組合の物流現場ができ、働く人を募集していると、共同購入でのチラシで知った。地域の仲間五人で応募した。三〇人の募集に一〇〇人以上も応募したが、五人全員採用となつた。私は面接担当者に仲間五人で来たと伝え、「一人、二人採用するなら五人全部なしにして」と言つたことを覚えている。

「長野高齢協」は、任意組合から「NPOワーカーズコープかがやき」に発展しその代表も務めるようになりました。

高齢協は、試行錯誤、失敗の経験をしながら、福祉、配食サービス、大学・企業との協同、製造販売、生活総合支援、各種講座、葬送、公共サービスなどの事業を県下全地域に広げ、三七五〇人の組合員が六億八千五百万円の事業を行うに至っています。

高齢者生協の中につくられたワーカーズコープかがやきは、生活協同組合法で規制されている事業にとりくみ、組合員の力を發揮しています。

八四歳になり「労協連三五年史」を機に、わが人生を振り返り、まさに波乱万丈な半生だったと感じています。こうした機会を与えて下さったことに感謝します。

これまでご支援ご協力頂いた関係者の皆様に深く組合として、事業高はあわせて約一七億円、組合員約四千四百人、就労者六五〇人に至っています。感謝申し上げます。

一九八〇年に立ち上げた「長野中高年雇用福祉事業団」は今日、労協ながの、長野県高齢者生活協同組合として、事業高はあわせて約一七億円、組合員約四千四百人、就労者六五〇人に至っています。

しかし、生活協同組合の面接だと思っていたのに、中高年雇用・福祉事業団直轄事業団（労働者協同組合）という、聞いたこともない名前だった。カッコ付きで協同組合があるので、まあ、そう大きくは変わらないだろうという思いだった。

五月六日、埼玉北部事業所として結団式があつた。

はじめは委託する生協も、受託する労協も不安だったのではないかと思う。学習会を重ね、全組合員経営で、一人ひとりが主人公として運営し、経営に責任を持つて働くところだと知った。役割を分担し、「よい仕事」というネームプレートを付けて働いた。

生協職員、生協側に直接雇用されているパートで働く方、そして労協の三〇人、総勢二〇〇人を超える現場である。最初は、生協パートと私たちとの働く条件の違いや仕事内容などで本部に不満をぶつけたが、本部も私たちが納得のいくまで話してくれた。

いつか、言いたいことをバンバン言い合える現場になつていていた。みんな働き者でいつも明るく笑い声が絶えなかつた。

生協の組合員拡大行動にも積極的に参加し、物流内の仕事も広がり、六〇人の仲間が働く現場になつていつた。冷凍、ドライ、産直野菜と部門ごとにリーダーを選んで、事業所委員会を設置し、仕事の状況をきちんと把握し、団会議を行つた。運営、経営も主体的に取り組み、みんな惜しみなくよい仕事をし、毎日、仕事に対する達成感を感じていた。

しかし、専務の永戸さんから言われたのは、「この現場だけが仕事ではない。こんな働き方をもつと広げるのが、あなたたちの役割だ。ぬるま湯につかつた状態をいつまでやつていいのか」と言われた。「そんなこと言われても、今の仕事で精一杯だ」とかわした。

そんな中で、仕事拡大の一・二・三運動」があつて、自治体行動に参加した。主体的に働く協同組合であること、地域でこのような働き方を広げたいことを伝えた。うまく言えなかつたが、社会に必要なことに、働いて賃金も得ながら関わつていけること、運動と事業を一体に取り組めることに共感し、まさに一石二鳥だなと思っていた。

じつふ工房立ち上げから地域の課題が

しかし、不況の波が委託側にも押し寄せ、一九九三年、厳しい現実を言い渡された。「来年三月を持って契約を解除したい」と。これまで協同組合提携事業として取り組んできたこと、今後も共に力を出していきたいと粘り強く交渉。結果、特例として、積み込み作業二〇人分の委託仕事が残つた。

私たちは、ここまでつくりてきた仲間たちとの関係をこのまま終りにしたくなかった。「仕事がなくなるのなら、何か自分たちで新しい仕事をつくりたい」と声が出た。

お弁当づくり・喫茶店(人が立ち寄れる場)など、

女性ならではの発想が次々と出されたが具体的には進まなかつた。そんなとき、「長野県北御牧村で女性たちが仕事おこしで豆腐づくりをやつてている」という新聞記事を見た。早速、朝礼で呼びかけ、手を挙げた八人で見学に行った。仲間たちは、「これだつたらやれる・いける」という思いで奮い立つた。

みんなに「仕事おこし」会議を呼びかけ、ほぼ毎日、仕事終了後に徹底した話し合いの場を持つた。事業計画書をつくり、場所探し・宣伝方法・資金計画・出資呼びかけ・建築屋さん・豆腐に必要な資材・機材・豆腐づくり指導者・天然にがり手配・豆腐命名と進めた。大豆は地域生産者に呼びかけ、自分たちも栽培する。法務局・保健所・営業許可等の手続きも、全組合員・地域の方に声を掛けて取り組んだ。

しかし、それが一旦白紙になる。こだわつて美味しい豆腐をつくつたとして本当に売れるのか、赤字になつたらどうするのか、だれが責任を取るのか等意見が出た。私は「ここまでみんなでやると話し合つてきた。白紙はあり得ない。やるしかない。責任は私が取る」と言つた。沈黙の状態が続いたが、一人が「やれるところからやろうよ」と言つてくれた。そこからまた、みんなの気持ちが前を向いた。

北御牧村から豆腐づくりの指導者に来てもらい、一〇日間特訓を受け、一九九五年六月、六坪の小さなお店でとうふ工房がオープンできた。昔ながらの、

甘くて濃厚なとうふが口コミで広がった。地域の方が買ってくれる。おからを買って下さったお客さんはレシピを付けて差し上げた。

普通の主婦たちが一つの仕事を起させた。そのことはすごい自信となつた。また、とうふ工房を通じて、地域との関係が広がり、地域の課題が見えるようになつた。「ここに買いて来られない人にも食べてほしい」「高齢者に食べもらいたい」。そんな思いから、おからも食材にして高齢者にお弁当を届けたい、という声が上がつた。この六坪の店を高齢者の配食事業にし、とうふ工房をもう少し広い場所にと話し合い、一九九六年一二月に移転。一九九七年二月、老人配食を目標に、安心・安全・手づくりの健康弁当「愛彩」をオーブンした。

食事業を通じて、独居老人・老夫婦世帯が多く、具合が悪くなつたときを考えると、もっと地域で高齢者を支える仕組みが必要だと話し合いになつた。深谷市福祉課にも食懇談会を申し入れ開催、地域の高齢者の現状と食の必要性を伝えた。

本部方針でもあつたヘルパー養成講座の計画を立て、行政にも協力を願つた。最初は取り合つてくれなかつたが、何回も足を運び、場所を貸してほしい、広報に掲載を、福祉課で担当できる講座を受け持つてほしい、の三つは実現できた。一九九八年に第一回のヘルパー養成講座を開催。すごい反響で、二〇〇五年まで三〇回開催し、一〇〇〇人のヘルパ

ーを養成した。

講座の修了生で、一九九九年五月、ヘルパーステーションだんらん（深谷）を立ち上げ、以後、だんらんグループとして、妻沼、熊谷ほほえみ、だんらん上柴と地域福祉事業所を立ち上げ、地域に根差す事業所として広がつていつた。

東北復興へ単身赴任

その後、私は本部で仕事をするようになり、センター事業団の副理事長を務めていたとき、東日本大震が起きた。五月に初めて震災の地に足を踏み入れた。ただただ、涙が出て、この日本、東北はどうなるのか。先の見えない状況に言葉もなかつた。七月に連合会の東北復興本部が設置されることになり、田中専務から「一緒に行つてほしい」と声を掛けられた。即、「行かせていただきます」と返事をした。

その夜、夫に「東北復興本部が設置される、私も異動する」と伝えた。後から夫が言つた言葉は、「自分にも相談してほしかつた」。そうだなと思つたが。単身赴任してよかつた。夫が自立できたからだ。

なんでも話し合える関係こそ

今、埼玉北部事業所は、若者サポートステーション、困窮者自立支援、ジョブトレ、障害者就労移行支援などの事業を行い、学童保育が二〇一七年四月から始まつた。埼玉北部全体での取組みとなつており、大きな発展段階を迎えている。今後の飛躍に期待したい。

最も大事にしてきたことは、徹底して話し合いをすること、何でも話し合える関係をつくるということだ。逆に言うと、何でも腹を割つて言える関係さえつくれば、この協同組合は回転し始めていくの

单身赴任した後は、自分で食事もつくり、私が会議で東京に帰つたときなど、そばを打つて待つてくれた。ありがたいと思った。

東北では、何をどうすればよいのか戸惑つた。最

初に取り組んだのが、職業能力開発機構の介護職員

養成講座だったが、地域への働きかけは空回りで、うまく進んでいかなかつた。それでも、各拠点を設置しながら地道に活動し、登米での人材育成事業で突破口が開けた。それぞれの地域でも緊急雇用の事業を企画し、仕事を一緒につくるうと呼びかけた。

糸余曲折しながら登米、石巻、亘理、気仙沼、陸前高田、大槌と六カ所の拠点ができ、八〇人の仲間が、それぞれの地域でがんばつてている。被災地での取組みに関われたことに感謝したい。

ではと思う。これは自然にできるものではなく、厳しい対立とか話し合いを経て手にできるものだ。排除はしない、仲間の良いところを認め合つて前に進む、考え方や意見のちがいは最初からあるものとして受け止め合う。苦労や困難は人のせいにするのでなく、みんなで受けとめ合つて乗り越える。

古谷直道

「私のワーカーズコープへの思い入れ」



普通のおばさんが仕事おこしで得たものは、かけがえのない仲間たちとの出会いだ。たくさんの働く場ができたことに感謝をしたい。労働者協同組合センター事業団という組織に会えたことにあらためて感謝したいと思う。

与えられずに困われるという哀しい一八年を体験した後、小企業を経て共済の協同組合である全労済の情報システムを造る仕事に携わりました。この経過の中では、「(一)の仕事は私がやるべき仕事だ」という感触がないままに、雇われ者の心境で働いていました。まさに「雇われ者根性」になっていたのですが、そのこと自体に満足できず、生きがいのない人生を送っていたように思われます。

全労済での居住まいも悪くなつてきた頃に、全労済にも労協にも、その創業の時代に関わつてこられた小林基愛さんに永戸さんを紹介いただき、それこそびっくりするような労協の話を聞かせてもらいました。条件が整つた時点で、喜び勇んで直ちに労協センター事業団に入団いたしました。

私は来年八〇歳になる老人です。五六歳のとき（一九九四年二月）に労協センター事業団に入りました。その当時の私の心境を、数年後に以下のように記しておりました。「私はこれまでさまざまな事業体（大企業・零細企業・下請け企業・協同組合）でさ

さまざまな仕事をしてきたが、かなりニビルで斜に構えた仕事観を密かに育てていたのではないかと思わ

実は私は、大手電機会社の日立に入社しましたが、労働運動をやることによって会社と対立し、仕事を

から700人分のビールを造るということになつたのです。

さあ一大変。まずは「キット」の輸入元を探し出し七〇〇人分のビールを造れるキットを手に入れました。次に、全国の名水（富士山の周りの名水、有名な銘酒の原料水、摩周湖の伏流水など）を探し、その近くの事業所に相談しながら、各地でビール造りを始めたのです。この作業の過程で、私は実にたくさんの多様な労協関係の皆さんに会い、話をし、共に働きました。

総会・総代会の直前に中心メンバーとなつていた片桐君たちが軽トラックで各地の出来立てのビールを集めながら知床に向かいました。会場のホテルにもビールの持ち込みが了承されており、三五〇人の交流会二晩のアルコールはこのビールで賄われました。交流会の冒頭、私がこのビールの素性と製造経過を説明し、皆さんに飲んでいただきました。御世辞も含めて概ね「美味しいよ！」という声が発せられ、私は感動の中に居ました。その頃、私は妻に「最近、人相が変わったね」と言わされました。多分、冒頭で記されたような「心の入れ替え」があつたのだろうと思います。そして、私はこのような経過の中に、ワーカーズコーポの真髄を見つけようとする癖を身に着けたようにも思われます。

その後、農業関連、病院清掃、きのこ労協、地域福祉など実にさまざまな仕事に取り組みました。二一世紀に入ると、クリーンキラー、上級ヘルパー講座、C.C.共済、福祉用具、健康日記、美里園芸福祉

の会、若者自立塾、B.D.F.、エネルギー関連などさまざまに雑多な分野でした。その多くは事業として行政の人たちとも交流を深めました。

その内の一つ、病院清掃に関する言いますと、日立で同じ職場にいた島君がこの先どうしようかという相談をもつて現れ、センター事業団に入団しました。彼は優秀な技術者・研究者でした。そこで、企業組合ひかり情報技術を立ち上げ、労協が展開する事業に関連する技術問題に一緒に取り組むことにいたしました。やがて、岩手県の盛岡赤十字病院で採取した埃たちの観察から、「埃の一生」というストーリーをつくり出し、「埃・ごみ・汚れ」の全体にどう対処するかの技術体系をつくり上げました。それまでは病院の清掃においては水に浸したモップが主役の作業でしたが、センター事業団の清掃においては、スーパークロスを中心を開発した道具を主役にし、水浸しにしないで埃をとり、汚れをとり、ごみを除く「新清掃方式」を確立したのです。そして、「新清掃の原則と基準」も設定し、清掃現場の改革に取りかかったのであります。それと並行して、島君は「次亜塩素酸水」を持ち込んできました。これは、消毒に有効であり、消臭にも、うがいにも使えます。これが何年かの経過を経て、今、クリー

ンキラーAという名で扱っているものとなっています。

私の後半人生二〇年ほどの間のワーカーズコーポにおけるこののような経過の中に、どのような真髄を見つけるのか？ それが大事なところであります。

「協同労働」および「協同労働の協同組合」、そしてワーカーズコーポは、今こそこの社会の改革について重要な役割を果たすものと期待が集まつてきていました。彼は優秀な技術者・研究者でした。そこで、企業組合ひかり情報技術を立ち上げ、労協が展開する事業に関連する技術問題に一緒に取り組むことにいたしました。やがて、岩手県の盛岡赤十字病院で採取した埃たちの観察から、「埃の一生」というストーリーをつくり出し、「埃・ごみ・汚れ」の全体にどう対処するかの技術体系をつくり上げました。それは前から気になつていています。「協同労働のよい仕事」についての私の理解が、加齢に伴いどれだけいいのか、ということです。

ワーカーズコーポの事業は、全体として健全経営で利益を上げ続けるものではなくては存続できません。そして、この事業そのものが生活と地域に真っ向から向かうもの、そして地域の人たちが担い手となり、まちおこし・村づくりに貢献するものではなくてはなりません。そしてさらに、この事業に参加する人、仕事をする人たちの人生を楽しく意義あるものにする、そんな「よい仕事」でなければなりません。

ん。

「協同労働」は、「雇用労働」や「公務労働」に比べて、働く人たちの主体性を大事にし、「自分の労働の素晴らしい一瞬」をより頻繁に感じるような環境条件を整えやすい労働形態です。これは大変あります。これが何年かの経過を経て、今、クリー

ることもあります。協同労働においては「よい仕事の瞬間」が頻繁に起こるものだから、そのよい雰囲気の中で、小さな幸せに満足し過ぎてしまう、そんな危険です。だから、常に新しい課題に挑戦し続けることが協同労働では必須のこととなるのです。そうしないと、良質の瞬間がやつてこなくなり、実質上、雇用労働と同じ状況になつたりするのです。

今日のワーカーズコーポの事業を見ると、自らが開発し自らが運営する事業の種類は多くありません。新しい事業を開拓するについて、自分たちだけで、ということにこだわってはいけません。企業や行政とも多様なコラボを追求し、地域に、社会に有効な新局面を開拓していくなければなりません。

こんな風に理解している訳ですが、こういう観点から見ると、私の二〇年間にわたる失敗にまみれつゝも新しい課題に挑戦したことの意味はあるのではなかろうか？ 少なくとも反面教師として。

ビールの製造から始め、全ての課題において、ワーカーズコーポの皆から支えてもらつたからこそ続けられた、特に永戸さんは一貫して導きかつ背中を押してくれました。その気持ちと確固とした方向性こそが、現在の協同労働の実態の中に組み込まれているものと確信しています。

挑戦で大事なのは、挑戦の結果得られる成果の大さではありません。一人ひとりが敏感であり、新局面ごとに小さいながらも方向性を明瞭に意識した

ことがあります。協同労働においては「よい仕事の瞬間」が頻繁に起こるものだから、そのよい雰

挑戦を繰り返すこと。その挑戦の数、挑戦の頻度こそが重要です。最近のワーカーズコーポ関連の集会に参加して思うのは、かつてよりも組合員の一人ひとりの発言の中に、この挑戦が感じられる、その頻度が増えているように思えます。一けた増えたかな、と思うほどに。しかも組合員だけではなくて、共同し連携する企業や行政や団体の方々の挑戦と重ね合わせ、絡まりながら現れているのが素晴らしいと思っています。ここに素晴らしい協同労働の未来が見

そが重要です。最近のワーカーズコーポ関連の集会に参加して思うのは、かつてよりも組合員の一人ひとりの発言の中に、この挑戦が感じられる、その頻度が増えているように思えます。一けた増えたかな、と思うほどに。しかも組合員だけではなくて、共同し連携する企業や行政や団体の方々の挑戦と重ね合わせ、絡まりながら現れているのが素晴らしいと思っています。ここに素晴らしい協同労働の未来が見

松沢常夫

「仲間の奮闘、誇りに突き動かされて—新聞三〇年」

だ。一九八六年二月の全日自労臨時大会で中西委員長、永戸中央執行委員とも退任、事業団に専念していくが、私は全日自労に残された。

「君はもうちよつと全日自労で頑張らないかん」委員長退任を表明した中央執行委員会を終え、高田馬場にある全日自労会館の会議室を出てきた中西さんに、私はそんな風に声をかけられた。どういう意味を込めて言われたのかは分からぬが、それから一年余も、全日自労本部で自分は何をしていたのか、全く記憶がない。(三、四年いた感覚がある)

私が引退した後、埼玉県の中央部で暮らしながら、「もうすぐ土に還る高齢者が土を耕し、農のあるまちづくりをしよう」と称して共同農場なるものを始めて四年目です。協同労働とまではいきませんが共同作業を通して、人付き合いの面倒くささと合わせて、時々は「よい仕事の瞬間」を感じたようになります。こんなことを通して協同労働の未来を見続け感じ続けたいと思っています。



「和はむづけよつと全日自労で」

全日自労機関紙「じかたび」編集部を辞め、事業団に入ったのは一九八七年五月。ちょうど三〇年前

えるように思います。

私が引退した後、埼玉県の中央部で暮らしながら、「もうすぐ土に還る高齢者が土を耕し、農のあるまちづくりをしよう」と称して共同農場なるものを始めて四年目です。協同労働とまではいきませんが共同作業を通して、人付き合いの面倒くささと合わせて、時々は「よい仕事の瞬間」を感じたようになります。こんなことを通して協同労働の未来を見続け感じ続けたいと思っています。

られなくなつた。酒井書記長に訴えると「そんなこと言つたつて…」と苦笑いされたが、限界だつた。

「もういいだろ、事業団に移りたい」と永戸さんと話した。入るとすぐ、宮城県松島での第八回総会だつた。全日自労では事業団への悪口ばかり耳にしていたが、そこには全く違う世界があつた。失業者を一人でもなくす、という情熱がほとばしる発言の数々とともに、大学を出て、前年事業団に入つたばかりという若い女性たちの奮闘に私は圧倒された。

病院清掃現場に配属された田中羊子さん（現・専務）は、「仕事を終え、足を引きずつて帰るおばさんを見ていたおじさんが、翌朝、一時間早出して、『疲れてるようだつたから少しやつておいたよ』と、さらつと言う」ことに注目。「病院をきれいにするだけではなく、もうちょっと深いところ—職員や患者さんとのふれあいのところで、新しい人間関係をつくつてきてている」と発言。

病院の職員食堂店長を務めていた田辺（矢吹）美樹さん（現・神奈川高齢協）は、「事業収入を上げ、賃金を上げるためにどうするか話し合い、何よりも手間をかけおいしいものをつくる点で一致。退院した患者さんやお年寄り向けの老人給食、健康に飲める居酒屋ができるなどの声も」と報告した。

私は、こうした発言を記事にしながら涙が止まらなかつた。こんなに素直に人間らしい職場づくり、よい仕事を追求しているのかという感動・共感と、

その事実を見ようとせず事業団批判を半ば受け入れていた自分に対する情けなさとで。「『本号から松沢編集長』と大きく載せろ」と永戸さんから指示された「じぎょうだん」新聞一面に、彼女たちの写真をアップで載せた。（私の前は、菅野さんが編集長を兼任していた）

生み出した誇りと行動

関わった二号目から「捨てるゴミの向こう」の連載を始める。病院清掃中、職員の部屋のゴミ箱に手を突っ込むと、瀬戸物の破片がむき出しで捨ててありケガをした、という話を聞き、「それ、書いてよ」と頼むと、「捨てるゴミの向こうにも人がいる」という一文で締めた原稿が届いた。「東京・NT」さんの投書としたが、本部勤務の田中夏子さんで、後に都留文科大学教授となつた。

その後、ゴミ出し中などに針を刺す事故が多發し

ていることを知り、働く者同士の関係を考え、自分たちの仕事も見直しながら、安心・安全な病院づくりを目指す記事を連載し、情報発信・共有を強めていく。これを機に、組合員たちが清掃という仕事の価値を実感し、事業団への誇りを持ち、ほとんどの病院職員に「じぎょうだん」新聞を購読してもらう事業所がいくつも生まれた。

この誇りは、仲間たちを活性化させた。一九九一年の「1・2・3運動」で、横浜・戸塚病院現場は、

バス停三つ先というところにできたパチンコ店の清掃の仕事を獲得した。これは、「パチンコ店と二股かけてた」という新人の一言に、「事業団でやらせてもらえないかしら」とひらめいた岩渕三重さん（当時、六三歳）をはじめとした行動力のたまものだ。朝、この話を聞いた岩渕さんは、昼に仕事を終えるとその足で新人と一緒に訪問。その後、現場の六人全員で行き、やる気をアピール。高園幸男所長（現・本部事業推進）が見積り、決まった。まさに主人公の、ちょっとお茶目な笑顔が忘れられない。

夕夜勤は午後一〇時から、深夜勤は午前三時からの休憩時間に「じぎょうだん」新聞を読み合わせている、という話を聞いた時は信じられなかつた。埼玉・大宮事業所（生協物流）でのことだ。「読んでいると、人間が人間らしく生きていこうという運動の中に身を置いているやりがいをひしひしと感じ嬉しくなる」と逢坂忠義所長は語つた。

分からなくてもいいんだ

事業団に入つて二カ月後、「いま『協同』を問うプレ集会」が開かれることになつていて。実行委員会には全く知らない団体の人たちも集まつてくる。何を目的に何をするのか。この成功に資する記事など、とても書けそうにない。「訳が分からぬ。自分にはとても無理だ」と永戸さんに泣き言を言った

永戸さんは「やつてみなきや分からぬ集会なんだから、だんだん分かってくるんじやないか」みたいなことを言つたように思つ。私は、いいかげんなことを言われると、ますます生真面目に考え込む面もあるが、分からなくともいいんだと思つたら解放された。

「こんなことまで載せるとは、すごい組織ですね」と研究者から驚かれたのは、「事業団は本当にいいところか」というタイトルをつけた、四一歳の永戸さんと三八歳の横倉しづ代さん（センター事業団埼玉北部事業所）の「ホンネ討論」。会議の後の飲み会でのやりあいを再現した。「事業団の『低賃金』だれがどうすれば上げられるか」というタイトルで、船橋地域事業団の古村伸宏事務局長（現・連合会専務）と団員三人との「ホンネ討論」を続けた。

罰で便所掃除とは

保育園児の娘から「小学校に上がると、悪いことをしたらトイレ掃除をさせられる」という話を聞いて、「橋のない川」の住井すゑさんに手紙を書いたことから、このテーマでの作品「つらいばつ」を含めて、単行本になつていない旧作短編をいただくことができた。実際に一六四回にわたつて掲載させていただいた。「生きる能力、働く能力こそ大切」という思想を育んでくれたと思う。東武動物公園園長だった西山登志雄さんの「カバ園長の便所掃除談義」

の連載と合わせて、感謝の言葉しかない。（住井さんの作品の一部は「わたしの少年少女物語」（労働旬報社）に。また、住井さんへのインタビューなどを掲載した「わたしの童話」は新潮文庫になつた）

劇症肝炎一步手前で四〇日入院

一九九七年、「あと一週間遅ければ劇症肝炎になり、八割方、命はなかつた」と言われ、四〇日間入院した。パソコンで「真っ黄色」を打ち間違え、「末期色」になつたことがあるが、永戸さんから「松沢、目が真っ黄色だぞ、すぐ病院に行け」と指示された。それでも「黄色いかなあ」とのんびり構えていたら、「すぐ車で行け」。喘息の薬が合わなかつたのが原因。後に「健康に問題あり人間座談会」を企画したが、「自分の命くらい敏感になれ」と叱咤された。（入院中は、石塚照子さんらが頑張ってくれた）

失敗も多々あつた。たいていは、軽率な判断をしてしまつたときだ。ある病院が委託単価を上げてくれたことがあつた。しかし、他の病院との関係で掲載はまづかつた。また、「匿名だからいいだろう」と、相手を批判するような記事を書き、契約を切る口実に使われたこともあつた。

「松沢が組織者だつて？」

ところで、「捨てるゴミの向こう」は、組織としての方針があつて始まつた訳ではないが、現場討論から病院への改善提案に進み、全国アンケートによる実態調査、マスコミ等への提起などのかたちで運動化していく。「中間総括座談会」でこの取り組みの性格を深め、全国事業所長会議では私も毎回発言した。田中夏子さんからは「松沢さんの仕事を見ていると、機関紙は運動の組織者だと思えてきた」と言われた。「松沢が組織者だつて？」と永戸さんに嘲笑されたが、ワーカーズの仲間にによる仲間のための新聞はどうあるべきか。根本的なテーマに回答がないまま、新聞の歴史は更新されていく。

「私なんかいなくてもいいと」

「じぎょうだん」新聞は、一九七九年一〇月、四月、月一回発行で出発。発送作業も本部にいるメン